

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第49集

館林市内遺跡発掘調査報告書

—平成24年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査—

間堀1遺跡（平24地点）

日向古墳群（平24地点）

岡野・屋敷前・岡遺跡（平24地点）

館林城跡・城下町（平24A、B地点）

天神遺跡（平24地点）

2012
館林市教育委員会

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第49集

館林市内遺跡発掘調査報告書

—平成24年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査—

間堀1遺跡（平24地点）

日向古墳群（平24地点）

岡野・屋敷前・岡遺跡（平24地点）

館林城跡・城下町（平24A、B地点）

天神遺跡（平24地点）

2012
館林市教育委員会

例　　言

- 本書は、平成24年度に国宝重要文化財等保存整備事業費補助金、群馬県文化財保存事業費補助金を受けて実施した館林市内遺跡発掘調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 本書において報告する遺跡名は、「遺跡台帳」に基づき以下のとおりである。地点名は、平成24年度の調査であることから、「平24地点」とする。なお、間堀1遺跡は本発掘調査であり、その他の遺跡は確認調査である。

間堀1遺跡　日向古墳群　岡野・屋敷前・岡遺跡
館林城跡・城下町　天神遺跡

- 調査組織は次のとおりである。

調査主体者	館林市教育委員会				
担当課	文化振興課文化財係				
調査組織	教育長　橋本　文夫 教育次長　坂本　敏広 文化振興課長　岡堀　英治 文化財係長　石崎　治 主事　奈良　純一 主事　堀越　峰之（平成24年9月30日まで） 主事　須藤　美樹 主事　磯　聰実 主事補　宮田　圭祐（平成24年10月1日から）				

- 調査作業員
内田 利雄 大瀧 光明 大杉 奈巳 阪口 丈夫 館野 駒三 寺嶋 美雪
橋本二三夫 原田 和沙 久田 進 前田 清美 三橋 瑞江
- 出土遺物、調査記録及び資料は、館林市教育委員会で保管している。
- 整理作業員
大杉 奈巳 阪口 丈夫 根岸 良子 橋本二三夫 原田 和沙 久田 進
前田 清美 三橋 瑞江
- 本書の編集・執筆については、奈良・宮田が中心となり行った。
- 遺物の実測・観察表及びその他の図版の作成は、奈良・宮田、大杉・根岸、原田・前田・三橋で行ったが、一部資料に関しては技研測量設計（株）に委託している。
- 資料はすべて館林市教育委員会にて保管している。
- 調査の実施及び本書刊行にあたり、下記の諸氏諸機関の協力を頂いた。
地権者各位 館林市都市建設部道路河川課 館林市都市建設部都市計画課 館林市環境水道部
水道課 館林市環境水道部下水道課 館林市農業委員会 館林市史編さんセンター

凡　　例

- 本書における挿図の縮尺は、図中に記した。
- 遺跡位置図は、館林市都市計画図（S=1/2500）を用いた。なお遺跡位置図中のスクリーンマーク [] は遺跡地、 [] は調査地を示している。
- 土層断面及び出土遺物の注記に用いた色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修「新版土色帖」に従った。一部、調査担当者の目視による判断も含まれる。

参考文献

本書を作成するにあたり、以下の文献を参考にした。

- 館林市教育委員会 『館林市埋蔵文化財発掘調査報告書』第1集～第48集
館林市教育委員会 『館林市特別編第4巻 館林城と中近世の遺跡』2010
館林市教育委員会 『館林市資料編第1巻 館林の遺跡と古代史』2011

目 次

例 言	
凡 例	
参考文献	
目 次	
挿図目次	
写真図版目次	
第1章 館林の環境	1・2
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1・2
第2章 本調査の概要	3～11
1. 間堀1遺跡（平24地点）	3～11
第3章 確認調査の概要	12～17
1. 日向古墳群（平24地点）	12
2. 岡野・屋敷前・岡遺跡（平24地点）	13
3. 館林城跡・城下町（平24A地点、B地点）	14、15
4. 天神遺跡（平24地点）	16、17
写真図版	
報告書抄録	

挿図表目次

第1図 館林市の位置	1
第2図 館林市の地形概念図	2
第3図 平成24年度調査遺跡の位置	2
第4図 間堀1遺跡（平24地点）	3
第5図 間堀1遺跡（平24地点）遺跡調査区・基本土層	3
第6図 間堀1遺跡（平24地点）セクション図、住居跡平面図	5
第7図 間堀1遺跡（平24地点）出土遺物実測図①	7
第8図 間堀1遺跡（平24地点）出土遺物実測図②	8
第9図 間堀1遺跡（平24地点）出土遺物実測図③	9
第10図 間堀1遺跡（平24地点）出土遺物実測図④	10
第11図 間堀1遺跡（平24地点）出土遺物実測図⑤	11
第12図 日向古墳群（平24地点）	12
第13図 日向古墳群（平24地点）基本土層	12
第14図 日向古墳群（平24地点）トレンチ配置図	12
第15図 岡野・屋敷前・岡遺跡（平24地点）	13
第16図 岡野・屋敷前・岡遺跡（平24地点）基本土層	13
第17図 岡野・屋敷前・岡遺跡（平24地点）トレンチ配置図	13
第18図 館林城跡・城下町（平24A地点、B地点）	14
第19図 館林城跡・城下町（平24A地点）基本土層	15
第20図 館林城跡・城下町（平24A、B地点）トレンチ配置図	15
第21図 天神遺跡（平24地点）	16
第22図 天神遺跡（平24地点）基本土層	16
第23図 天神遺跡（平24地点）出土遺物実測図	16
第24図 天神遺跡（平24地点）トレンチ配置図	17
第1表 間堀遺跡遺物一覧表	6

写 真 図 版

間堀1遺跡（平24地点）

- 1-1 間堀1遺跡（平24地点） 調査点全景
- 1-2 調査区全景（南から）
- 1-3 調査状況
- 1-4 住居跡（東から）
- 1-5 出土状況
- 1-6 出土状況 南東部
- 1-7 出土状況 南東部詳細
- 1-8 出土状況 北西部
- 1-9 遺物取り上げ後（南から）
- 1-10 調査区内北壁セクション
- 1-11 住居跡内ベルト南壁（北東から）
- 1-12 住居跡内ベルト南壁（北西から）

日向古墳群（平24地点）

- 2-1 調査地全景
- 2-2 土木重機による掘削
- 2-3 1T（西から）
- 2-4 1T（東から）
- 2-5 1T遺構状況（北から）
- 2-6 1T南壁セクション（北から）

岡野・屋敷前・岡遺跡（平24地点）

- 3-1 調査地全景
- 3-2 土木重機による掘削
- 3-3 1T（西から）
- 3-4 1T（東から）
- 3-5 1T遺構状況（東から）
- 3-6 1T北壁セクション（南から）

館林城跡・城下町（平24A地点）

- 4-1 土木重機による掘削
- 4-2 1T（西から）
- 4-3 2T（東から）
- 4-4 1T東壁・木材出土状況（西から）
- 4-5 1T東壁・木材取り除き後
- 4-6 1T木材取り除き後の玉石列出土状況
- 4-7 1T南壁セクション（北から）

館林城跡・城下町（平24B地点）

- 5-1 調査地全景
- 5-2 1T（南から）
- 5-3 1T（北から）
- 5-4 1T東壁・砂利部分出土状況（西から）

天神遺跡（平24地点）

- 6-1 調査地全景
- 6-2 土木重機による掘削
- 6-3 1T（西から）
- 6-4 2T（西から）
- 6-5 3T（西から）
- 6-6 3T戸井戸完掘（北から）
- 6-7 4T（西から）
- 6-8 5T（西から）

出土遺物写真

- 1-13 住居跡内ベルト東壁（北西から）
- 1-14 住居跡内ベルト東壁（南西から）
- 1-15 住居跡内ベルト（西から）
- 1-16 住居跡内ベルト（南から）
- 1-17 住居跡内ベルト（南から）
- 1-18 住居跡内ベルト（南から）
- 1-19 住居跡内（東から）
- 1-20 遺物集中箇所
- 1-21 遺物集中箇所（1-19下層）
- 1-22 住居跡内土坑検出状況（東から）
- 1-23 住居跡内土坑完掘（東から）
- 1-24 調査終了後調査区全景（南から）

第1章 館林市の環境

1. 地理的環境



第1図 館林市の位置

館林市は、群馬県の南東部、関東地方のほぼ中央部に位置する人口約8万人の都市である。市域は東西約15.5km、南北約8.0kmと東西に長く、総面積は約60km²である。北は渡良瀬川を隔てて栃木県に、東は邑楽郡板倉町に、南は谷田川を隔てて邑楽郡明和町に接する。明和町の南には利根川が東流し、群馬県と埼玉県の県境となっている。県庁所在地の前橋市までは約50km、東京（台東区浅草）へは約65kmの距離にあり、首都圏との結びつきも強い。

群馬県南部は、「邑楽・館林」地域と呼ばれ、群馬県の中では低地に位置している。館林市の標高は、15m台（大島町東部）から33m台（高根町）である。市域全体の地形はおおむね平坦であるといえる。本市の地形を概観すると、低台地である「洪積台地」と低地帯である「沖積低地」に分けることができる。市域中央部に「洪積台地」が東西に延びるように所在し、その周辺に「沖積低地」が広がる。

この「洪積台地」は、「邑楽・館林台地」と呼ばれ、太田市高林から本市中央部を東西に延び、隣接する板倉町まで続いている。また、大泉町古海から本市高根に至る台地の北側に沿って、日本最古の砂丘の一つである「館林砂丘」（埋没河畔砂丘）が走っており、本市最高標高点はこの上にある。

「沖積低地」は、おもに利根川や渡良瀬川によって形成されたものである。台地北側の低地帯には、旧河道、微高地や自然堤防が目立ち、一方、台地南側の低地帯では、茂林寺沼など大小の沼や湿地帯が形成されている。こうした台地や低地などからなる本市の地形は、北西から南東へ向かって緩く傾斜する傾向が見られ、台地面と低地面の比高差も北部で大きく南部では小さくなっている。

「邑楽・館林台地」は、低地帯から延びる多くの谷地により樹枝状に開析されている。そのなかでも市内最大の谷は、本市中央部を東流する鶴生田川及び城沼にかけての谷で、台地を南北に二分している。こうした洪積台地を開析する谷には、他にも茂林寺沼、蛇沼、近藤沼などの池沼を伴うものが多く、本市景観の特徴の一つとなっている。

2. 歴史的環境

館林市内に所在する遺跡は、145ヶ所である。昭和63年刊行の『館林市の遺跡』（市内遺跡詳細分布調査報告書）には、そのうちの144ヶ所について詳細が報告されている。

分布調査による採集遺物から大別した、各時代の遺跡数は次のとおりである。

旧石器時代の遺跡3遺跡、縄文時代の遺跡13遺跡（縄文土器のみ採取できた遺跡）、弥生時代の遺跡は0（弥生時代の遺物を採取できた遺跡2遺跡）、古墳時代～平安時代の遺跡（土師器の出土した遺跡）96遺跡（うち縄文時代の遺物も採取できる遺跡は23遺跡）、古墳は17遺跡（古墳総数25基）、中世生産施設1遺跡、中世城館址12遺跡、近世城館址2遺跡である。（ただし、複合した時代の遺物散布地が見られるため、その中心になると考えられる時代でまとめたものである。）

これらの遺跡の分布は、地形的な特徴と大きく関わっていることが観察される。館林市内に所在する遺跡の時代的変遷と地形的な関わりを概略してみると、次のようにある。

《旧石器時代》

この時代の遺跡は、市内の標高の高い地域に集中する傾向を見せる。邑楽・館林台地の北西に沿って、鞍掛山脈と地元で呼ばれる埋没河畔砂丘上に、その多くが確認されている。

《縄文時代》

この時代になると、遺跡数が増えるとともに洪積台地上に営まれるようになる。前期や中期の遺跡は、池沼や谷地を望む舌状台地上の平坦面に確認されることが多い。後期以降は遺跡数は減少し、その所在は、台地の斜面から微高地に移る傾向がある。後・晚期の遺物分布は低地（沖積地）にもおよぶ。

《弥生時代》

弥生時代の遺跡として確認されたものはないが、微高地や台地の斜面等で、遺物などがわずかに確認されている。

《古墳時代》

前期の遺跡は少ない。遺跡は、洪積台地の斜面からテラス状の微高地に所在するが多く、この傾向は、弥生時代の遺物散布に似ている。中期には、遺跡の数が増えるとともに、その所在は、

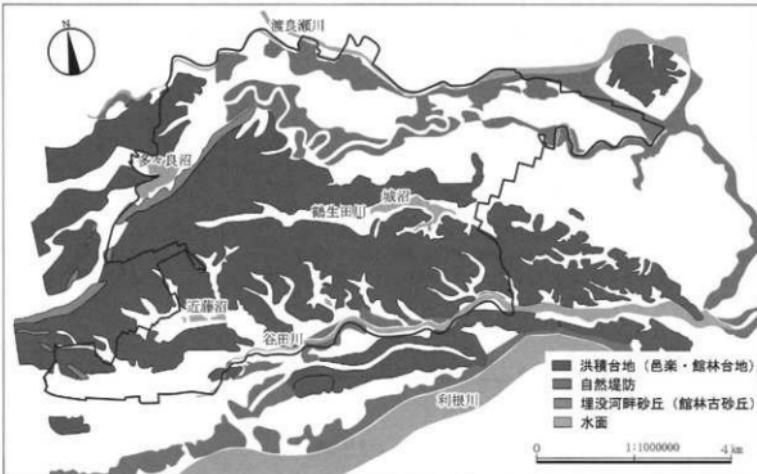
台地の斜面から台地上の平坦面へと移行する。後期には、遺跡数は増大し、台地上の平坦部に所在する場合が多い。墳墓としての古墳は、25基が残存している。古墳群が2ヶ所あり、一つは日向地区を中心とする邑楽・館林台地上、もう一つは高根地区を中心とする内陸河畔砂丘上にある。その他単独のものも多いが、そのいずれもが谷や谷地等をみおろす洪積台地上に所在している。

《奈良・平安時代》

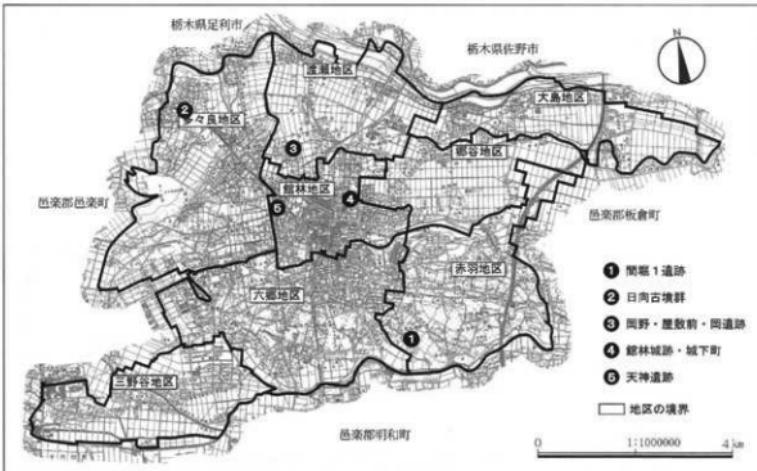
この時代の遺跡は急増する。台地の全面で遺物の採取ができるところから、この時代以降は台地上に普遍的に集落等が営まれてきたことを示唆している。

《中世・近世》

この時代の城館跡については、伝説的な要素が多く実体ははっきりしないが、中世末には館林城が築かれ、近世には館林城を中心として城下町が形成された。



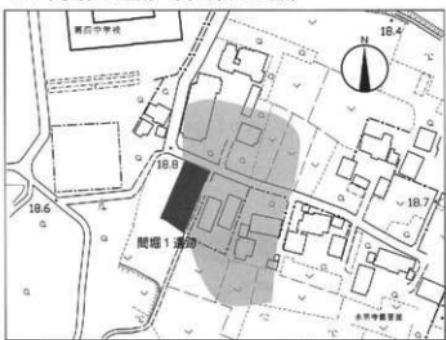
第2図 館林市の地形概念図



第3図 平成24年度調査遺跡の位置

第2章 本発掘調査の概要

1. 間堀1遺跡（平成24地点）



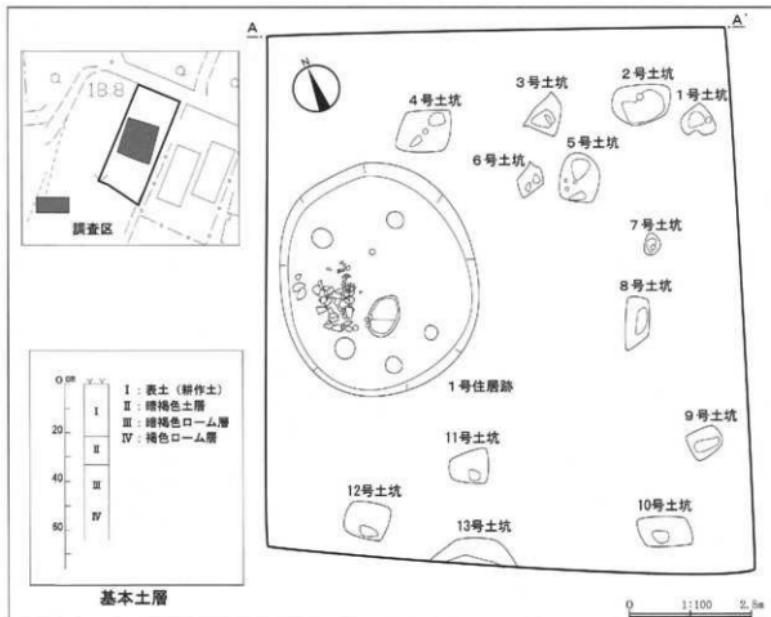
第4図 間堀1遺跡 (1:2500)

所在地 館林市上赤生田町字上ノ前
3466-1
調査原因 個人住宅
調柾期間 平成24年 4月24日～5月31日
調柾面積 120m²

(1) 遺跡と周辺の環境

間堀1遺跡は館林市役所から南方へ約2km、市立第四中学校の周辺に位置する。谷田川の支谷である蛇沼に突出する、小さな舌状洪積台地上に所在する。周辺は比較的広い台地であり、蛇沼水面から約7m、周辺の水田面からは約3mの標高差がある。遺跡周辺は宅地化が進んでいるものの、現在も農地が多く残る地域である。標高は約18mである。

本遺跡ではこれまでに数回の発掘調査が行われ、18軒の竪穴式住居跡が確認されている。時期別にみると、縄文時代前期が1軒、縄文時代中期が12軒、古墳時代が5軒であった。その他にも遺物集中箇所、集石土坑等が見つかっており、縄文時代前期から中期にかけて、また古墳時代の集落跡であったことが判明している。



第5図 間堀1遺跡調査区・基本土層 (1:100)

今回調査が行われた地点は平成21年度の確認調査の際に遺物集中箇所が見られたことから、住居跡の存在が推定されていた地点である。

(2) 調査の概要

間堀1遺跡（平24地点）の調査は、平成21年度に行われた確認調査の結果をもとに、遺物の集中が見られた箇所を中心とし、工事予定期域の地形に合わせて調査区域を設定した。調査区域は南北12m×東西10mである。土木重機により表土を掘削後、その後は土層断面の観察を行いつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の検出を行った。現地表面からローム層までの深度は約40cmであった。

(3) 基本土層

本遺跡の基本土層は、第Ⅰ層～第Ⅳ層に分けられる。第Ⅰ層は、耕作土層である。

第Ⅱ層は暗褐色土層である。本遺跡は以前にツヅジが植えられていたこともあり、一部根による擾乱も認められるが、下部の第Ⅲ層のローム層との漸位的な層であり、いわゆる「黒色土層」と考えられる。層厚約10cm。

第Ⅲ層は、いわゆるローム層である。第Ⅳ層もローム層であるが、第Ⅳ層と比べ粘性・しまり共に弱い。また、古墳時代の住居の多くは第Ⅲ層を掘り抜き、第Ⅳ層を床面としている。

(4) 検出された遺構

今回の調査では、住居跡1軒、土坑13基が検出された。住居跡の年代は、覆土中から阿玉台式土器が出土していることや、その形態から、縄文時代中期中葉に比定される。土坑の年代は、住居跡と同時期のものと考えられるが、出土遺物も少なく、住居跡との関係性も含め今後の課題である。

(5) 出土遺物

今回出土した遺物は縄文時代中期の土器を中心であり、特に1号住居からの阿玉台式土器の出土が目立つ。同様に中期の勝坂式土器も数点確認されているが、住居跡は確認できなかった。また、少量ではあるが、黒浜式土器など前期の土器も出土した。

第7図1～6は、前期の土器片であり、同一原体による羽状縄文が目立つ。1～3は表土からの出土である。7・8は残存状況の良い阿玉台式土器であり、施文の仕方や、ナデの程度など、良質な資料である。金雲母を胎土に含む。第9図～第11図38～42、69・70は浅鉢である。特に第9図の39などは光沢を持つまで丁寧に研磨されているだけでなく、朱彩が施してある。40は対応する孔が欠損しているが、補修孔を持つ淺鉢である。補修孔は穿孔の大きさに差異はあるものの、土器の内面・外側双方からあけられているが、外側からの穿孔は貫通しておらず途中で孔をあけることを止め、内面から孔を開けている。

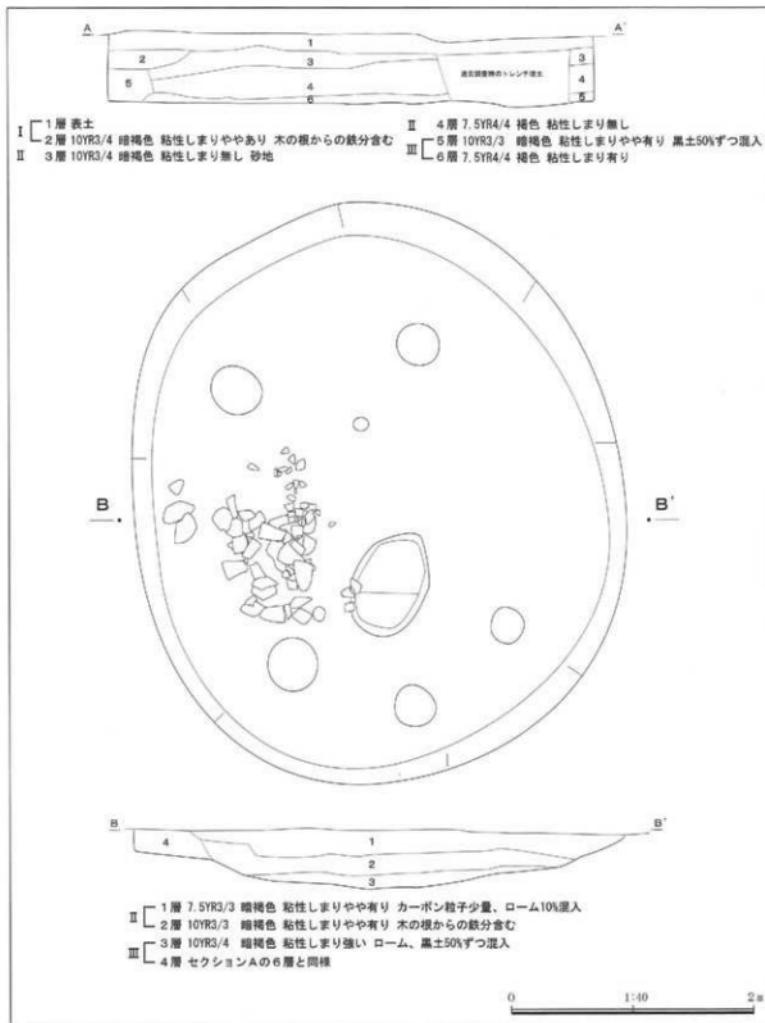
第11図1～3は石器である。1は黒曜石製の無茎錐である。2は打製石斧であり、刃部の再生剥離が行われる。剥離面に磨滅がみられる。3は磨石である。敲打痕以外は広く磨面となっている。

(6) まとめ

間堀1遺跡では、今回の調査で確認された阿玉台式期の住居跡だけでなく、勝坂式期の住居跡も過去調査で検出されている。邑楽・館林地域は、阿玉台式土器・勝坂式土器それぞれの主な分布範囲に囲まれてはいるが、邑楽・館林市域では勝坂式土器の出土例は少なく、近隣の太田市でも少量の破片資料を確認するに留まっている。しかし、本遺跡では両方の住居跡が明確に存在し、多くの良好な土器が残されていることは、異なる土器を作成した人びとの行動や相互の関係性を考察する際の一助となるだろう。

本遺跡に限ったことではないが、邑楽・館林地域は群馬県内でも特に「黒色土層」が薄く、間堀1遺跡のように地表から50cmほどでローム層まで達してしまう場所も多い。そのため後世の人の為の擾乱を受けているだけでなく、遺物の出土層位を確認することが困難となっている。

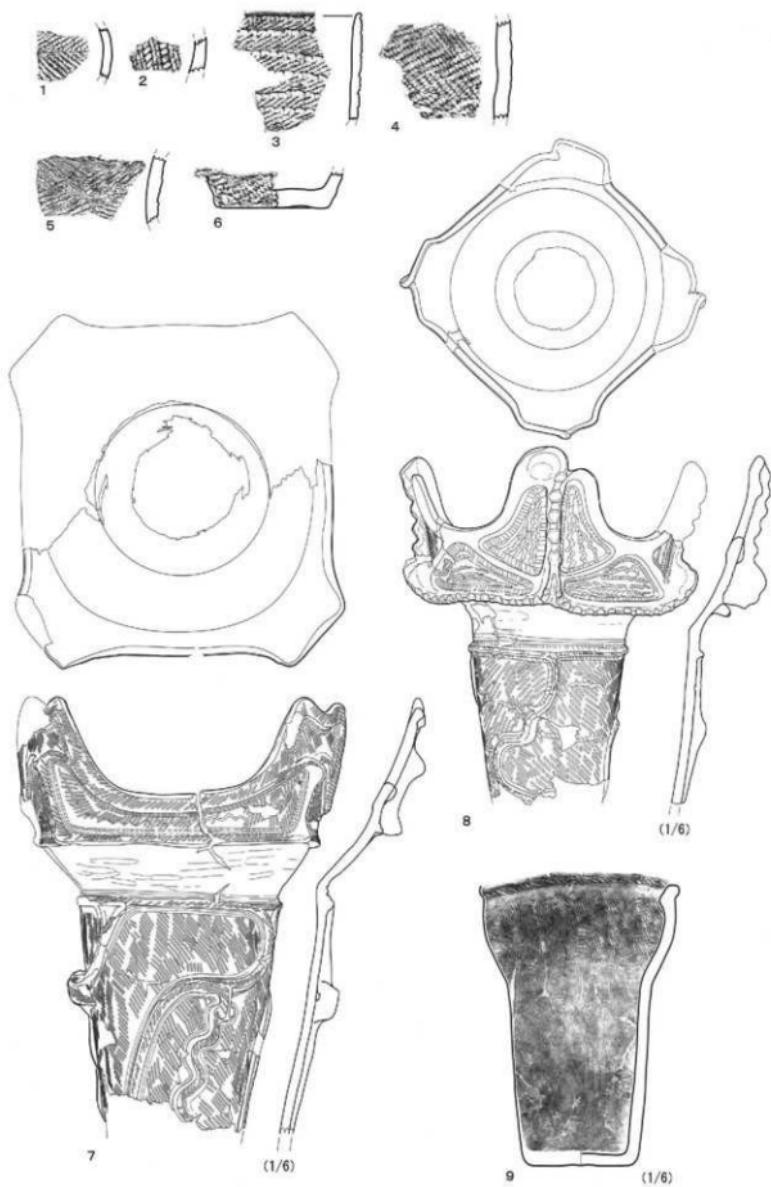
現状だけでなく過去の調査結果からも勘案して本遺跡では、今後も遺構・遺物の検出が見込まれる。遺物の出土層位の詳細な記録も含めた調査を行っていく必要がある。



第6図 間堀1遺跡セクション図、住居跡平面図 (1:40)

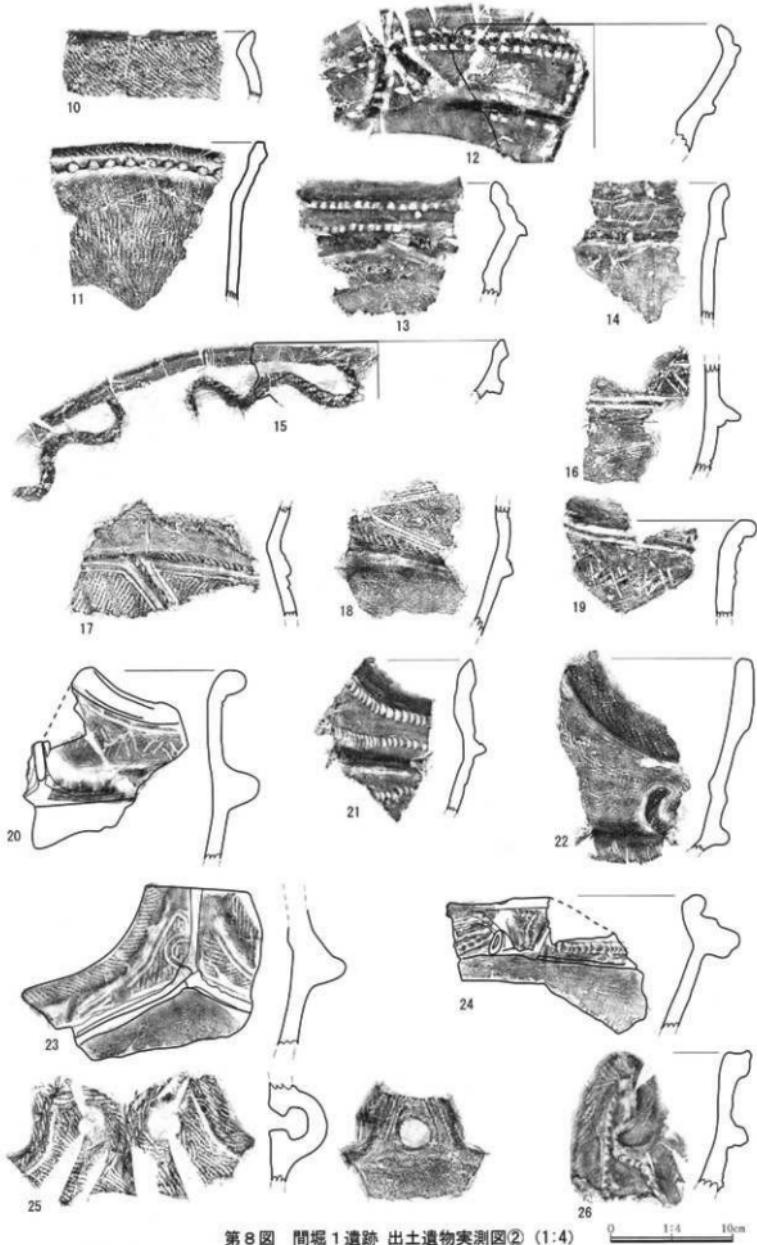
表1 出土遺物觀察表

No.	種別 種類	残存状態	特徴・その他の 計測値(単位:cm.()は推定値)	時期・備考	出土 位置
1	漆鉢	胴部片	右・下方に向ての縦文LRによる羽状織文	関山式	表土
2	漆鉢	胴部片	付加条縦文LR+ミを下方に向て施文	関山式	表土
3	漆鉢	口縁部片	縦文LRを右方向へ施文	関山式	表土
4	漆鉢	胴部片	右・下方に向ての縦文LRによる羽状織文	黒浜式	1往
5	漆鉢	胴部片	縦文Rを右方向へ施文し、その後下方に向て縦文Rを施文	黒浜式	1往
6	漆鉢	底部	縦文LR	黒浜式	1往
7	漆鉢	3/4残存、底部欠	地紋に縦文LR。腹部に無文帯を削出。ナデ。器高(53.9)、口径(40.5)	阿玉台式	1往
8	漆鉢	3/4残存、底部欠	地紋に縦文LR。腹部に無文帯を削出。ナデ。器高(44.3)、口径(36.7)	阿玉台式	1往
9	漆鉢	ほぼ完形	地紋に縦文LR。器高(35.2)、口径(25.4)	阿玉台式	1往
10	漆鉢	口縁部片	縦文LR	阿玉台式	1往
11	漆鉢	口縁部片	縦文LRをより右上方向に施文し、口縁部下の隆起を削り押す	阿玉台式	1往
12	漆鉢	口縁部片	横状工具による押し引き施文。口径(22.0)	阿玉台式	1往
13	漆鉢	口縁部片	ヘラ状工具による押し引き、内面ナデ	阿玉台式	1往
14	漆鉢	口縁部片	口縁部に粒状を貼り付け沈底を施す。内・外面ナデ	阿玉台式	1往
15	漆鉢	口縁部片	隆起上に縦文LRを施す。口径(19.5)	阿玉台式	1往
16	漆鉢	口縁部片	半乾竹管状工具による施文。	阿玉台式	1往
17	漆鉢	頭部	体部と壇帯上に縦文LRを施す	阿玉台式	1往
18	漆鉢	頭部	強烈に縦文LRを下方に向て施す。ナデにより無文部削出。金雲母	阿玉台式	1往
19	漆鉢	口縁部片	ナデ	阿玉台式	1往
20	漆鉢	口縁部片	半乾竹管状工具による施文。内面ナデ	阿玉台式	1往
21	漆鉢	口縁部片	ヘラ状工具による押し引き施文。金雲母・角閃石	阿玉台式	1往
22	漆鉢	口縁部片	2本単位の条痕。金雲母	阿玉台式	1往
23	漆鉢	口縁部片	縦文LR、帯状貼り付け半乾竹管状工具による施文。内・外面部丁寧なナデ	阿玉台式	1往
24	漆鉢	口縁部片	半乾竹管状工具の跡を削り押す。ナデ・紹子を重ね口縁部装飾を作る	阿玉台式	1往
25	漆鉢	口縁部片	縦文Rの押す・引む施文	阿玉台式	1往
26	漆鉢	口縁部片	内・外面ナデ。金雲母	阿玉台式	1往
27	漆鉢	口縁部片	ヘラ状工具による押し引き	阿玉台式	1往
28	漆鉢	口縁部片	ナデ。金雲母	阿玉台式	1往
29	漆鉢	口縁部片	施状工具による押し引き。ナデ	阿玉台式	1往
30	漆鉢	口縁部片	研磨。長石・角閃石・雲母	阿玉台式	1往
31	漆鉢	口縁部片	ナデ。金雲母	阿玉台式	1往
32	漆鉢	口縁部片	隙帶を貼り付け。真石	阿玉台式	1往
33	漆鉢	口縁部片	縦文LR。金雲母	阿玉台式	1往
34	漆鉢	口縁部片	6本単位の横状工具による施文	阿玉台式	1往
35	漆鉢	口縁部片	横状工具による交叉状突起と条縞を施す	鶴谷式	1往
36	—	口縁部荷葉	横状工具による施文。ナデ	阿玉台式	1往
37	—	口縁部荷葉	内面擦痕	阿玉台式	1往
38	後鉢	4/5残存、底部欠	木質邊の穿孔一ヶ所。内・外面部研磨。器高(13.7)、口径(34.2)	阿玉台式	1往
39	後鉢	口縁部片	表面を削す。丁寧な研磨、口径(49.0)	阿玉台式	1往
40	後鉢	口縁部片	内外から掃除する。外側より穿孔まで削った後、内面より穿孔。口径(47.5)	阿玉台式	1往
41	後鉢	口縁部片	内・外側に丁寧な研磨。光沢。角閃石多い。口径(42.0)	阿玉台式	1往
42	後鉢	口縁部片	内・外側に丁寧な研磨。光沢。角閃石多い	阿玉台式	1往
43	漆鉢	口縁部・胴部片	隙帶状にヘラ状工具による連續刺突を施す	漆版式	1往
44	漆鉢	口縁部片	棒状・ヘラ状工具による連續刺突。半乾竹管状工具による注痕と刺突	漆版式	1往
45	漆鉢	口縁部片	ヘラ状・棒状工具による施文。ナデ	漆版式	1往
46	漆鉢	口縁部片	ヘラ状・半乾竹管状工具による押しうき	漆版式	1往
47	漆鉢	胴部片	隙帶上にヘラ状工具による刺突。光沢	漆版式	1往
48	漆鉢	胴部片	半乾竹管状工具による連續・棒状・ヘラ状工具による刺突。長石	漆版式	1往
49	漆鉢	口縁部片	口縁部に粒状を貼り付けナデ。施紋はヘラ状工具で刺突後、沈底	漆版式	1往
50	漆鉢	胴部片	隙帶上にヘラ状工具による刺突	漆版式	1往
51	漆鉢	胴部片	半乾竹管状工具による施文	漆版式	1往
52	漆鉢	口縁部片	ヘラ状工具による施文。ナデ。砂利多い	漆版式	1往
53	漆鉢	胴部片	ヘラ状・棒状工具。長石	漆版式	1往
54	漆鉢	胴部片	ヘラ状工具	漆版式	1往
55	漆鉢	胴部片	条痕	漆版式	1往
56	漆付土器か	胴部片	感文E	漆版式	1往
57	漆鉢	底部	縫合貼り付け付後、ヘラ状工具による刺突	漆版式	1往
58	漆付土器	脚部	角閃石	漆版式	1往
59	漆鉢	胴部片	付加条縦文LR+ミを下方に向て施文	鶴文中期	1往
60	漆鉢	胴部片	熱糸文E	加曾利E式	1往
61	漆鉢	胴部片	熱糸文E	加曾利E式	1往
62	漆鉢	頭部	縦文LR。区面隆帯上にも縦文を施す	加曾利E式	1往
63	漆鉢	口縁部片	研磨	加曾利E式	1往
64	漆鉢	胴部片	縦文LRを右方向へ施文	加曾利E式	1往
65	漆鉢	胴部片	縦文LRを右方向へ施文	加曾利E式	1往
66	漆鉢	底部	新代灰	鶴文中期	1往
67	漆鉢	底部	研磨灰	鶴文中期	1往
68	漆鉢	底部	研磨灰	鶴文中期	1往
69	漆鉢	口縁部片	内・外丁寧に研磨。砂利・長石・石英・角閃石	鶴文中期	1往
70	漆鉢	口縁部片	口縁貼り付け。ナデ	鶴文中期	1往
71	土製円窓	—	縦文LR。洞を開け丁寧に研磨	鶴文中期	1往
72	土製円窓	—	縦文LR。洞を開け丁寧に研磨	鶴文中期	1往
73	土製円窓	—	周縁を丁寧に研磨	鶴文中期	1往
1	石鏡	—	黒曜石、長径24・短径19・厚さ0.3	—	1往
2	打斧	方部一部欠損	刃先あり。長径(10.0)・短径5.5・厚さ2.9	—	1往
3	磨石	—	刃先あり。長径11.8・短径7.9・厚さ4.4	—	1往



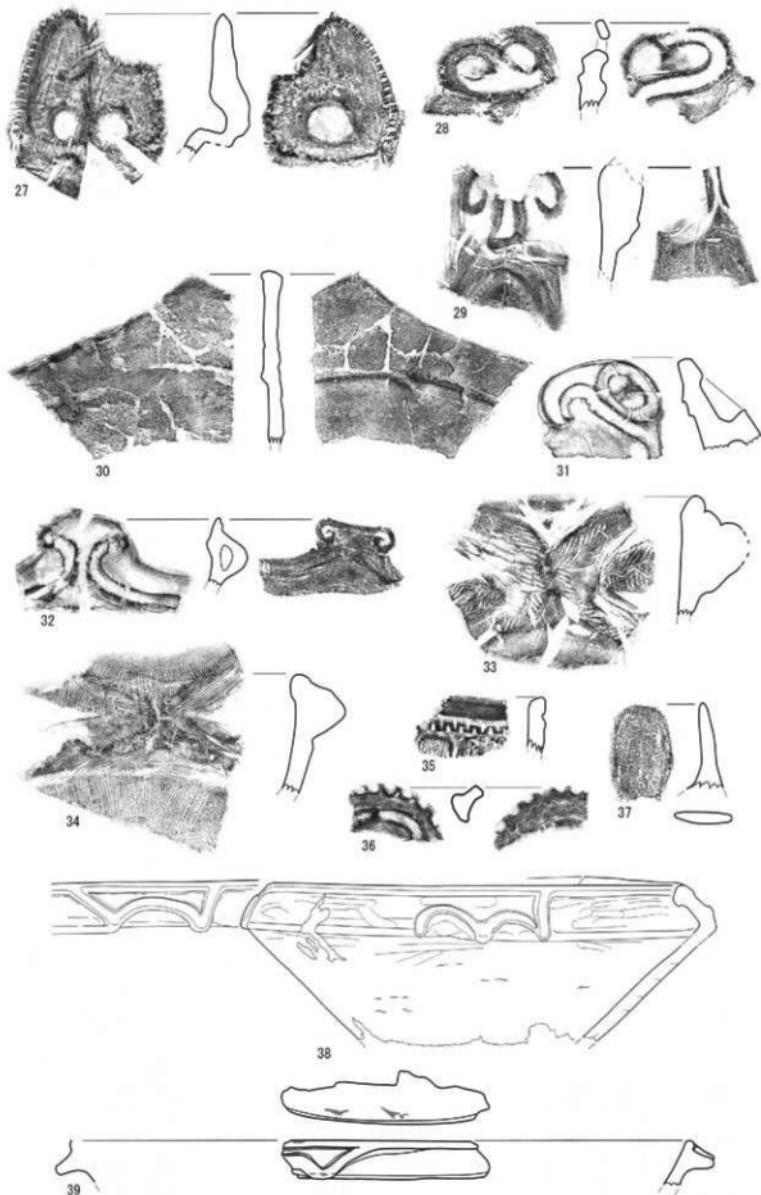
第7図 間堀1遺跡 出土遺物実測図① (1:4)

0 1:4 10cm



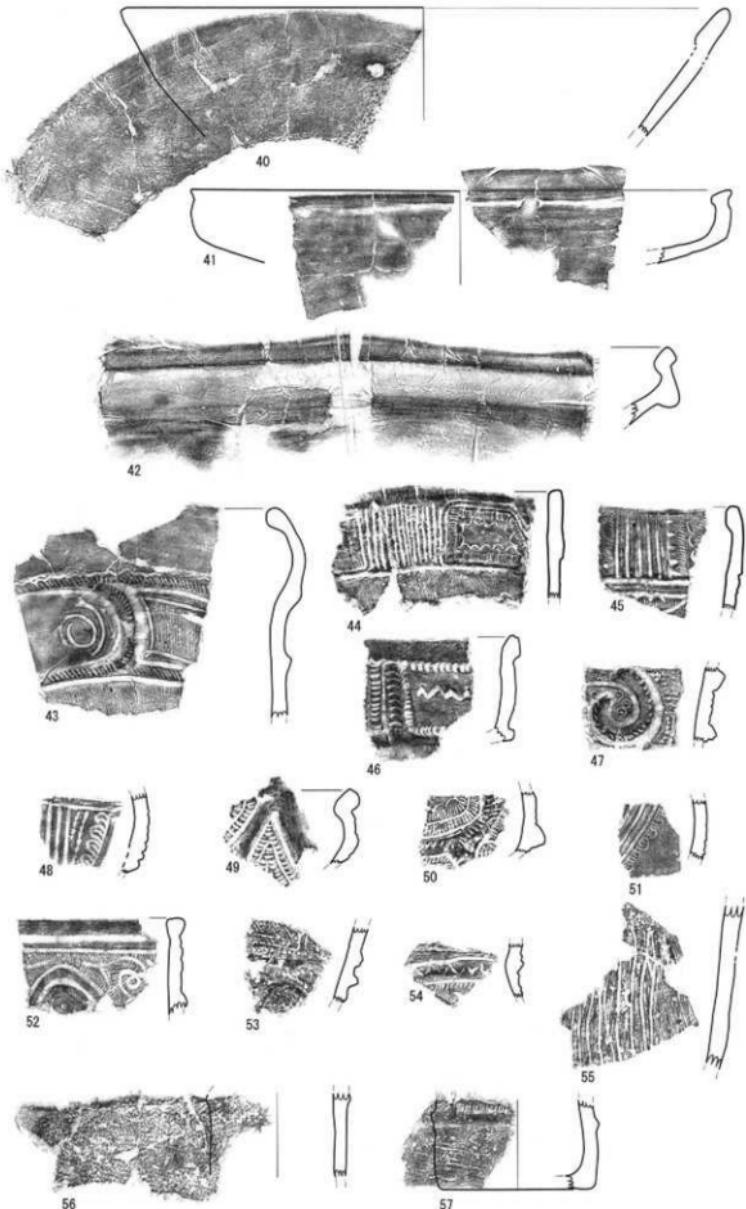
第8図 間堀1遺跡 出土遺物実測図② (1:4)

0 1:4 10cm



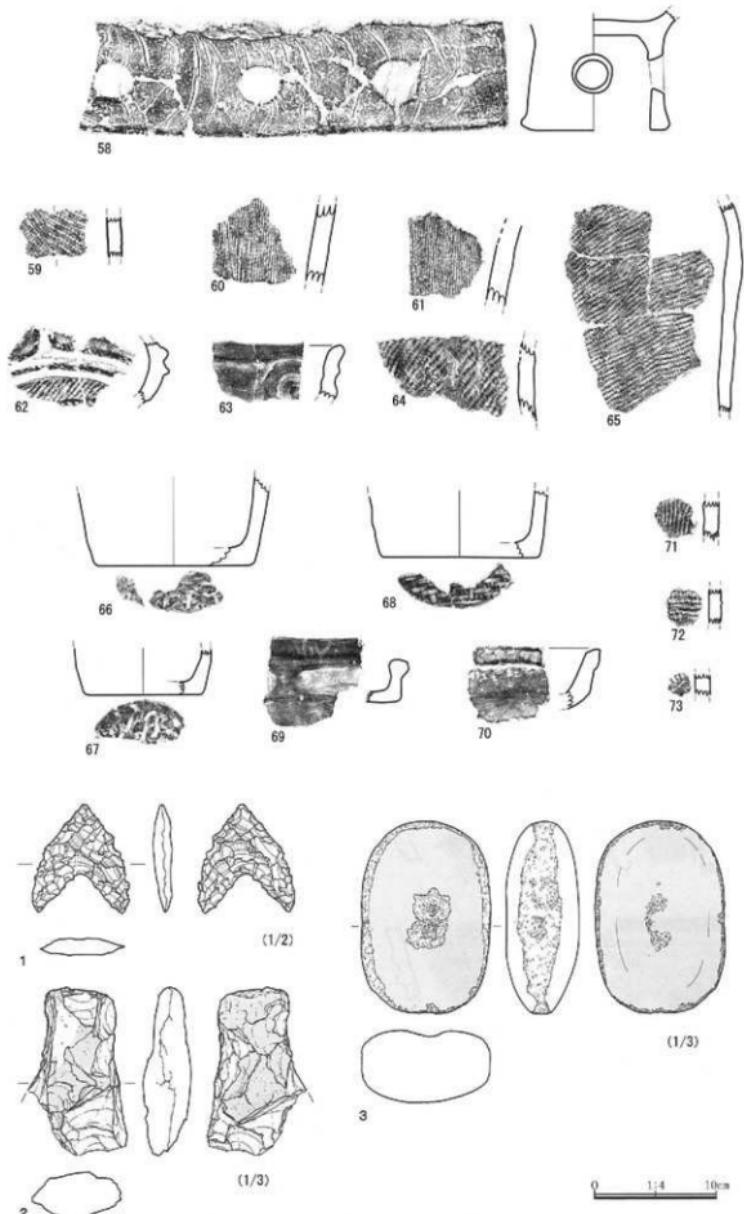
第9図 間堀1遺跡 出土遺物実測図③ (1:4)

1:4 10cm



第10図 間堀1遺跡 出土遺物実測図④ (1:4)

0 1:4 10cm



第11図 間堀1遺跡 出土遺物実測図⑤ (1:4)

第3章 確認調査の概要

1. 日向古墳群（平成24地点）



第12図 日向古墳群（1:2500）

であり、本遺跡はその中の住宅敷地内に所在する。標高は約25mである。

(2) 調査の概要

日向古墳群（平24地点）の確認調査は、工事予定区域の地形に合わせ1本のトレンチを設定し（南北1m×東西10m）、土木重機により表土を掘削後、その後は土層断面の観察を行いつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の検出を行った。現地表面からローム層までの深度は、約40cmであった。

(3) 基本土層

本遺跡の基本土層は、第Ⅰ層～第Ⅲ層に分けられる。Ⅰ層は表土であり、耕作土のほか、炭や廃棄物等も確認される。

Ⅱ層は暗褐色土層であり、粘性・しまりがあり、ローム層までの漸位的な層である。Ⅲ層はローム層である。

(4) 検出した遺構

東西方向に走る、幅約1mの溝1条を確認したが、遺物はなく、その性格は不明である。

(5) まとめ

表土は耕作土だけでなく、炭や廃棄物等も確認される。ローム層を掘り込む溝が一条確認されており、堆積の状況から近代の開発行為に伴うものではないと考えられるが、出土遺物もなく、その年代・性格は不明である。

本調査区域については保存の対象となる遺構・遺物等が確認できなかったことから、開発行為について埋蔵文化財への影響はないものと判断した。

所在地
館林市日向町字台769-1
調査原因
その他建物
調査期間
平成24年5月17日
調査面積
10m²

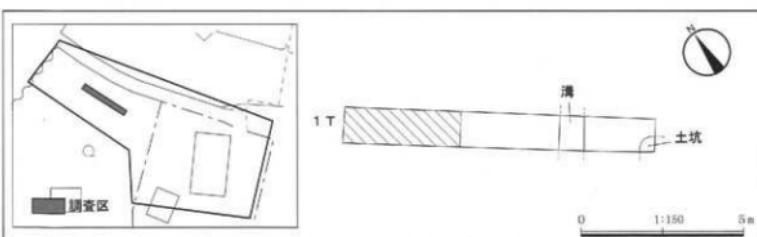
(1) 遺跡と周辺の環境

日向古墳群は館林市の市街地の北西、矢場川を西から北に臨む台地上に所在する。北を渡良瀬低地、南を多々良沼の沼沢地に挟まれる。「上毛古墳総覧」には円墳24基が記載され、そのうち、11基が現存する。過去には平成6年度及び平成12年度に調査が行われている。平成6年度の調査では土器や須恵器の大甕などの遺物が出土した。

近隣は農地と宅地が混在する地域



第13図 基本土層



第14図 日向古墳群 トレンチ配置図（1:150）

2. 岡野・屋敷前・岡遺跡（平成24地点）



第15図 岡野・屋敷前・岡遺跡（1:2500）

である。標高は約24mである。

（2）調査の概要

岡野・屋敷前・岡遺跡（平成24地点）の確認調査は、工事予定区域の地形に合わせ東西に1本のトレンチ（南北1m×東西10m）を設定し、土木重機により表土を掘削後、その後は土層断面の観察を行いつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の検出を行った。現地表面からローム層までの深度は約40cm～70cmであった。

（3）基本土層

本遺跡の基本土層は、第Ⅰ層～第Ⅲ層に分けられる。第Ⅰ層は表土である。

第Ⅱ層は黒褐色土層であり、ローム粒も少量混じり、粘性・しまり共にある。層厚約28cm。

第Ⅲ層は褐色ローム層であり、粘性・しまり共にある。

（4）検出した遺構

トレンチ内を人力で精査した結果、溝2条、土坑数ヶ所を確認した。

（5）出土した遺物

カワラケ（燈明皿）1点、内耳土器片数点、須恵器片、磁器片を確認した。その他、近隣の土地の表土からは縄文土器片が採取できた。

（6）まとめ

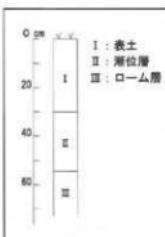
本遺跡では溝2条を確認できたが、遺物等年代を比定できる材料がなく、年代・性格を判断するに至らなかった。また、対象地は以前に建築物（住宅）があった影響かトレンチ1の東部は擾乱の影響を受けている。

本調査区域については保存の対象となる遺構・遺物等が確認できなかつたことから、開発行為について埋蔵文化財への影響はないものと判断した。

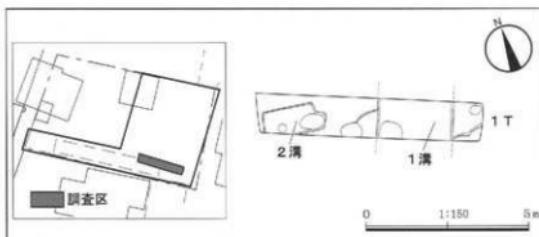
所在地	館林市岡野町字大道北 560-8、560-31
調査原因	個人住宅
調査期間	平成24年7月10日
調査面積	10m ²

（1）遺跡と周辺の環境

館林市街地の北方、東武佐野線渡瀬駅の西方約0.9kmに位置する。線路を挟み、南方に都市計画道路西部1号線が通る。邑楽・館林台地の北縁であり、北に渡良瀬川水系の沖積低地、南に同低地から浸食した谷に挟まれた台地上に立地し、遺跡全体に古墳から平安にかけての遺物が散布する。近隣地域は宅地・農地・山林が混在するが、近年は宅地開発が盛



第16図 基本土層



第17図 岡野・屋敷前・岡遺跡トレンチ配置図（1:150）

3. 館林城跡・城下町（平成24A地点、B地点）



第18図 館林城跡・城下町 (1:2500)

【A地点】

所在地 館林市大手町862-1、
862-7
調査原因 集合住宅
調査期間 平成24年7月25日
調査面積 17m²

【B地点】

所在地 館林市大手町862-6、
862-9
調査原因 その他建物
調査期間 平成24年11月28日
調査面積 20m²

(1) 遺跡と周辺の環境

館林城跡・城下町は、館林市街地の所在する北部の台地全面に広がっている。

城郭中心部は邑楽・館林台地から城沼に突出する舌状台地の端突にあり、城下町はその西の台地上にある。北の旧矢場川により形成された低地と、南の鶴生田川に挟まれている。

館林城は中世から近世にかけての城郭で、戦国時代に赤井氏により築かれた。その後、柳原康政の入城により近世の城郭の形が整えられ、幕末に至るまで、7家の大名による藩政の中心となった。

遺跡の所在地は現在の市街地中心部と重なるため、開発に伴いその遺構の多くは失われているが、現在でも本丸や三の丸の跡地をはじめ、一部に土塁などの遺構が残されている。

調査地周辺は市街中心部として開発されており、駅や官公署に近く、商店なども多く立地することから、市内でも特に宅地としての利用が盛んである。今回の調査地は、近世の絵図等から推定すると、「大手門」(追手門)が立地していた場所、またはその周辺及び掘りあつたと思われた。標高は約20mである。

なお、調査地は開発に伴って平成24年度内に2回の調査が実施された。

(2) 調査の概要

館林城跡・城下町（平24地点）A地点、B地点の確認調査は、工事予定区域の地形に合わせ、(A)東西に2本（南北2m×東西4.5m、南北2m×東西3m）、(B)南北に1本（南北20m×東西1m）のトレンチを設定し、土木重機により表土を排除しつつ掘り下げた。その後は、土層断面の観察を行いつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の検出を行った。

(3) 基本土層

本遺跡の基本土層は、第Ⅰ層～第Ⅲ層に分けられる。第Ⅰ層は、土地改良に伴う搅乱土である。

第Ⅱ層は暗褐色土層であり、粘性・しまり共にややある。その形成要因は今回の調査のみでは判断できないが、第Ⅰ層と比べ均質な土が堆積している。層厚約10cmである。

第Ⅲ層は黒褐色土層である。粘性が強く、この層を境にして湧水がある。

【A地点】

a. 検出した遺構

トレンチ内を人力で精査した結果、1トレンチより溝を1条確認した。

b. 出土した遺物

すり鉢・陶磁器片、木材等 木材の用途は不明であるが、径40cm程度の木材を截ち割り、表皮を下にした状態で出土した。

【B地点】

a. 検出した遺構

トレンチ内を人力で精査した結果、土坑1ヶ所を確認した。その他、トレンチ北側で東西方向に掘削痕とその上に砂利が敷かれた箇所を確認した。

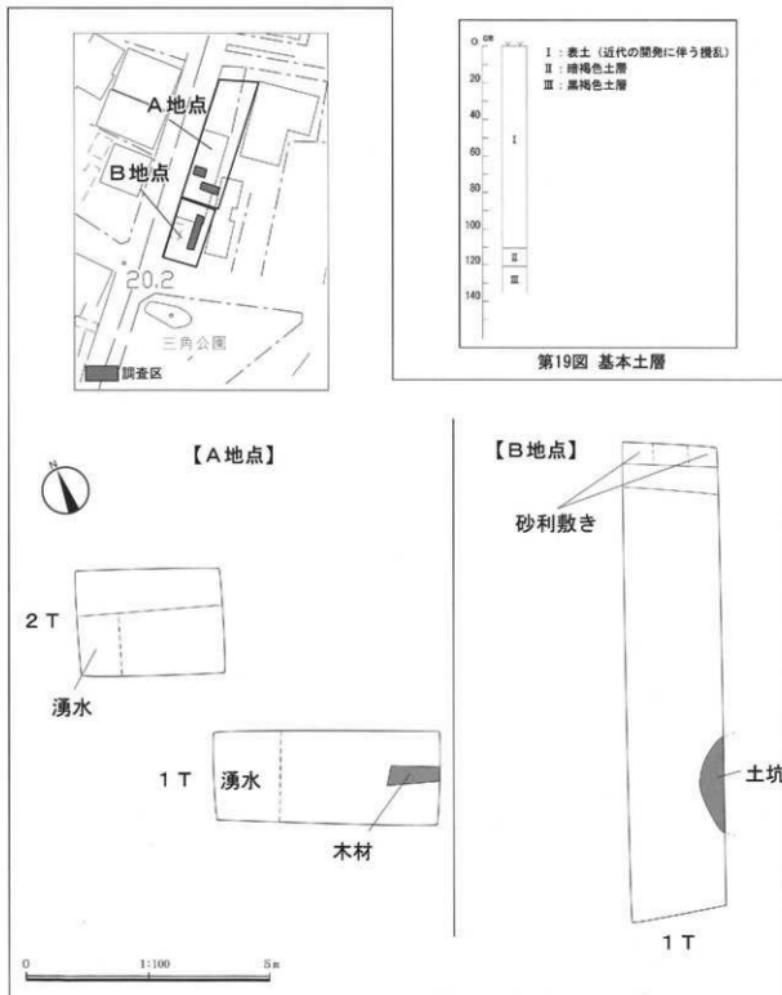
b. 出土した遺物

すり鉢・陶磁器片

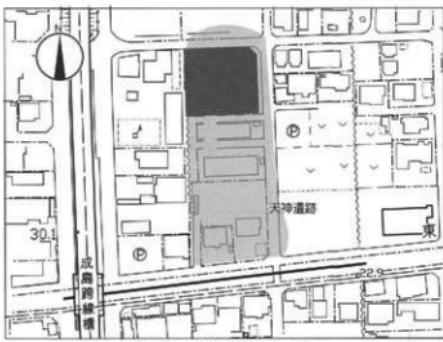
(4) まとめ

地権者からの聞き取りで、対象地には以前に建築物が建っていたことがわかった。A・B地点と

もに地表から近い部分は擾乱されており、コンクリート片等が見られた。また、敷地北側に至るほど擾乱の影響を強く受けている傾向にあった。また、土中は水分が多く、A地点の2トレンチでは地表から90cm地点付近から水が湧き、以下の調査は不可能であった。これらのこととは本調査区が大手門（追手門）に関連する堀の一部であった可能性を示すものと思われる。本調査区域についてでは保存の対象となる遺構・遺物等が確認できなかったことから、開発行為について埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



4. 天神遺跡（平成24地点）



第21図 天神遺跡 (1:2500)

川が流れ、これに向かって北から開析する小規模な谷が見られる。標高は約24mである。

天神遺跡では平成6年にも集合住宅建設に伴う確認調査が実施されている。その際には溝3条、井戸1基、円形の竪穴状遺構が確認されている。また、大永三年（1523）の紀年銘のある板碑のほか、中世のものと見られる遺物が比較的多く確認されている。

（2）調査の概要

天神遺跡（平24地点）の確認調査は、工事予定区域の地形に合わせ東西に5本のトレンチ（南北1.5m×東西25m）を設定し、土木重機により表土を排除しつつ掘り下げた。その後は、土層断面の観察を行い一つ人力で掘り下げ、遺構・遺物の検出を行った。現地表面からローム層までの深度は約40cmであった。

（3）基本土層

本遺跡の基本土層は、第Ⅰ層・第Ⅱ層に分けられる。第Ⅰ層は耕作土であり、層厚は約25cmである。

第Ⅱ層は褐色ローム層である。

（4）検出した遺構

トレンチ内を人力で精査した結果、井戸1基を確認したほか、多数の溝・土坑を確認した。溝・

【A地点】

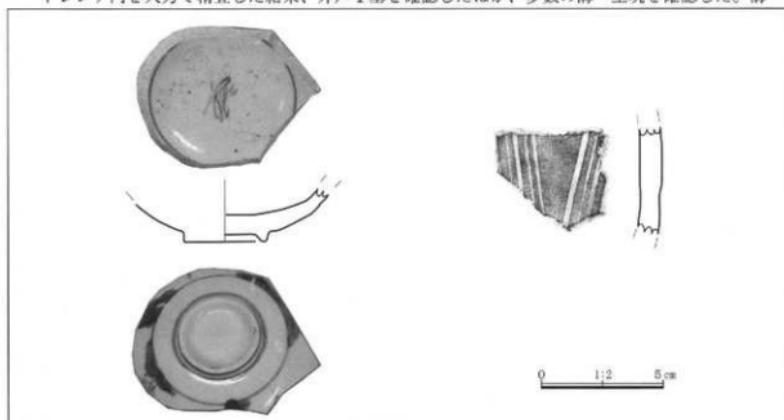
所在地 館林市新栄町天神
862-5, 862-9
調査原因 集合住宅
調査期間 平成24年12月12日～
12月20日
調査面積 187.5m²

（1）遺跡と周辺の環境

館林市街地から西方、東武伊勢崎線館林駅から北西に約0.9km、市街地の所在する台地の西方台地上に所在する。西方で国道122号線に接続し、駅や病院にも近く、近隣地域では区画整理事業が進行している。邑楽・館林台地の内奥部にあたり、対象地から南方へ約0.5kmの位置には鶴生田川が流れ、これに向かって北から開析する小規模な谷が見られる。標高は約24mである。



第22図 基本土層



第23図 天神遺跡 出土遺物実測図 (1:2)

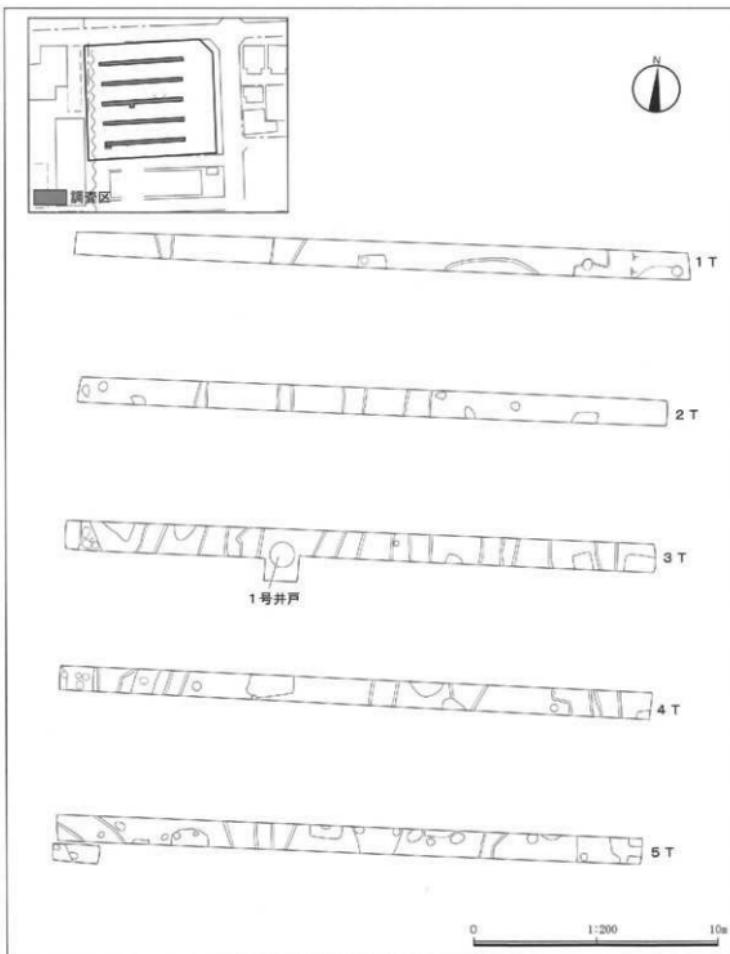
土坑の大半は遺物を伴わなかった。大多数の遺構が南北方向に走る。井戸については現地表面から約95cm掘り下げたところで湧水し、以下の調査は不可能であった。

(5) 出土した遺物

内耳土器片や、すり鉢片と、陶磁器片が数点出土している。

(6) まとめ

設定したトレンチ全てから多くの溝・土坑が確認された。地権者からの聞き取り及び登記事項証明書などから、対象地は過去に農地として利用されていたことが確認できることから、検出した遺構の多くは耕作痕である可能性が高いと考えられる。本調査区域については保存の対象となる遺構・遺物等が確認できなかつたことから、開発行為について埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第24図 天神遺跡トレント配置図 (1:200)

写 真 図 版

間堀1遺跡（平24地点）

(写真図版)



1-1 調査地全景



1-2 調査区全景（南から）



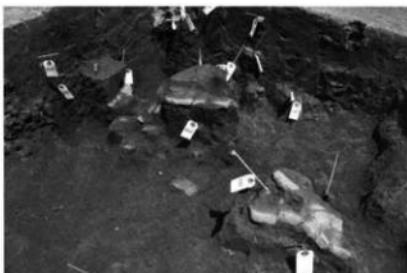
1-3 調査状況



1-4 住居跡（東から）



1-5 出土状況



1-6 出土状況 南東部



1-7 出土状況 南東部詳細



1-8 出土状況 北西部



1-9 遺物取り上げ後（南から）



1-10 調査区内北壁セクション



1-11 住居跡内ベルト南壁（北東から）



1-12 住居跡内ベルト南壁（北西から）



1-13 住居跡内ベルト東壁（北西から）



1-14 住居跡内ベルト東壁（南西から）



1-15 住居跡内ベルト（西から）



1-16 住居跡内ベルト（南から）



1-17 住居跡内ベルト（南から）



1-18 住居跡内ベルト（南から）



1-19 住居跡内（東から）



1-20 遺物集中箇所



1-21 遺物集中箇所（1-19下層）



1-22 住居跡内土坑検出状況（東から）



1-23 住居跡内土坑完掘（東から）



1-24 調査終了後調査区全景（南から）

日向古墳群（平24地点）

(写真図版)



2-1 調査地全景



2-2 土木重機による掘削



2-3 1 T (西から)



2-4 1 T (東から)



2-5 1 T 遺構状況 (北から)



2-6 1 T 南壁セクション (北から)

岡野・屋敷前・岡遺跡（平24地点）

(写真図版)



3-1 調査地全景



3-2 土木重機による掘削



3-3 1T（西から）



3-4 1T（東から）



3-5 1T 遺構状況（東から）



3-6 1T 北壁セクション（南から）

館林城跡・城下町A地点（平24地点）

(写真図版)



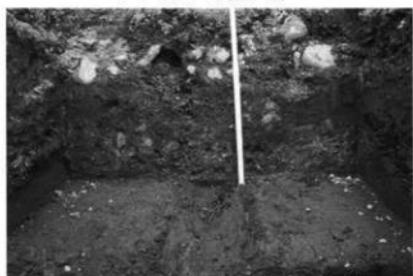
4-1 土木重機による掘削



4-2 1 T (西から)



4-3 2 T (東から)



4-5 1 T 東壁・木材取り除き後



4-4 1 T 東壁・木材出土状況 (西から)



4-6 1 T 木材取り除き後の玉石列出土状況



4-7 1 T 南壁セクション (北から)

館林城跡・城下町B地点（平24地点）



5-1 調査地全景



5-2 1 T (南から)



5-3 1 T (北から)



5-4 1 T 東壁・砂利出土状況 (西から)

天神遺跡（平24地点）



6-1 調査地全景



6-2 土木重機による掘削



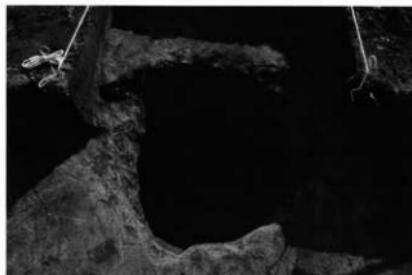
6-3 1T (西から)



6-4 2T (西から)



6-5 3T (西から)



6-6 3T 井戸完掘 (北から)

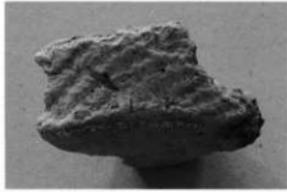
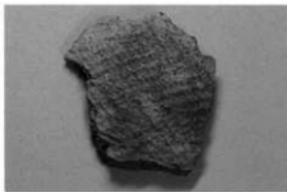
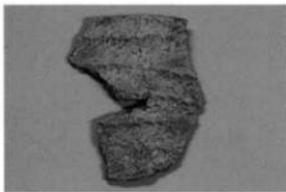
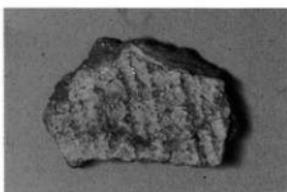
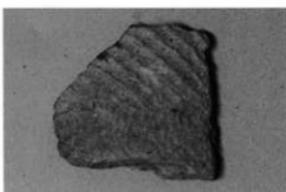


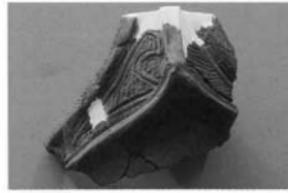
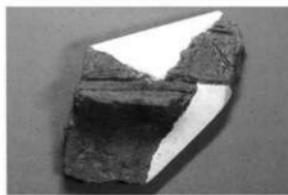
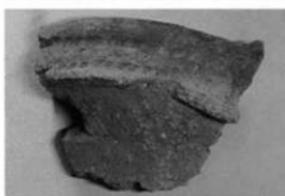
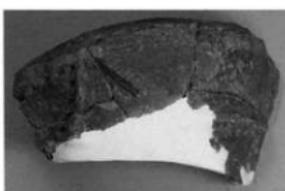
6-7 4T (西から)

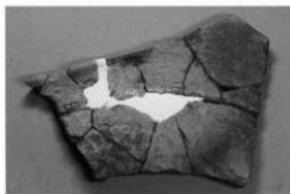
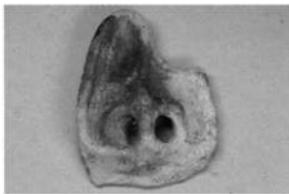
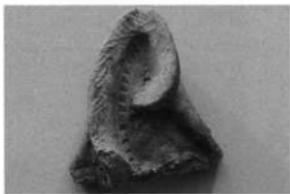


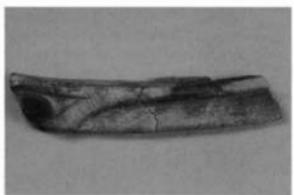
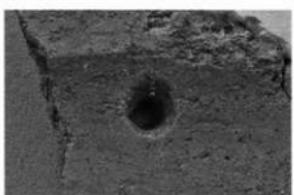
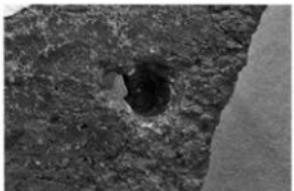
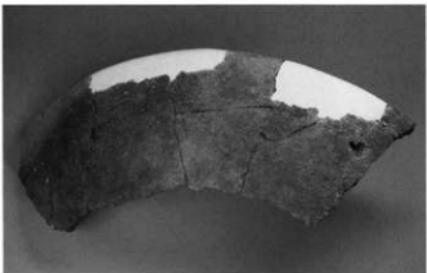
6-8 5T (西から)

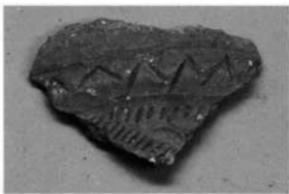
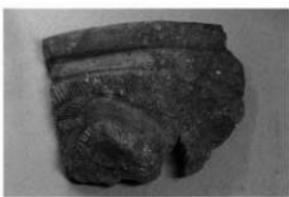
間堀 1 遺跡 (平24地点)

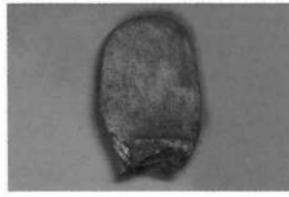
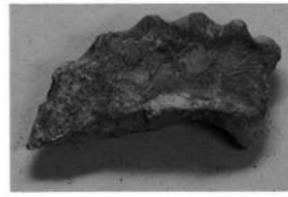
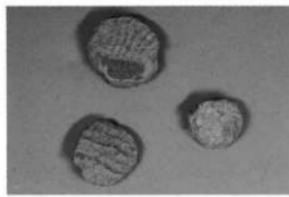
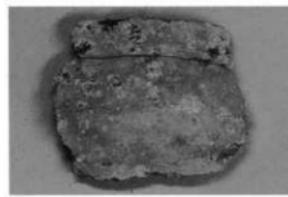
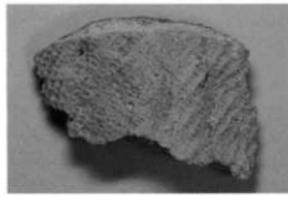
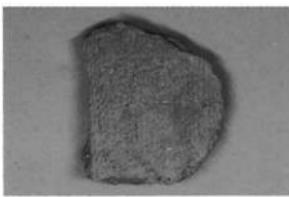
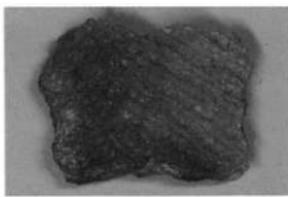


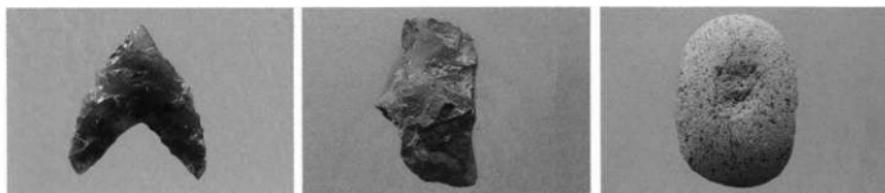




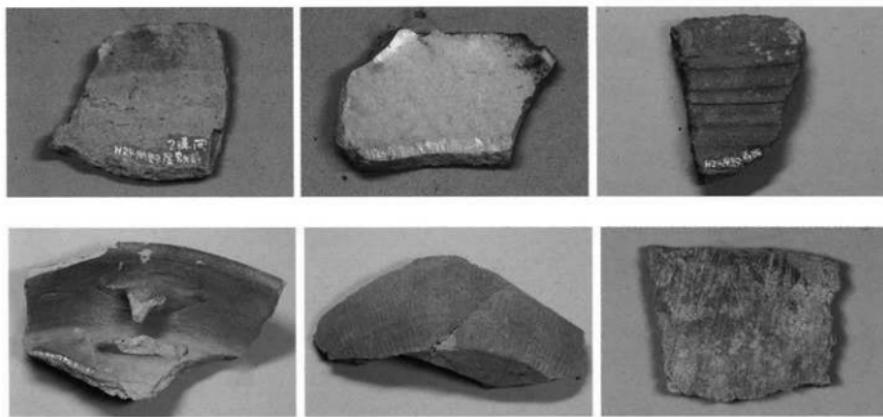




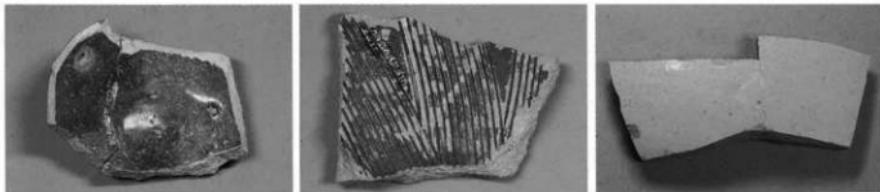




岡野・屋敷前・岡遺跡（平24地点）



館林城跡・城下町（平24地点）



天神遺跡（平24地点）



抄 錄

ふりがな	たてばやししないいせきはっくつちょうさほうこくしょ						
書名	館林市内遺跡発掘調査報告書						
副書名	平成24年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査				卷次	_____	
シリーズ名	館林市埋蔵文化財発掘調査報告書				シリーズ番号	第49集	
編集者名	奈良 純一 宮田 圭祐				編機集閑	館林市教育委員会	
編集機関所在地	〒374-8501 群馬県館林市城町1番1号						
発行年月日	2013(平成25)年3月31日						
市町村コード	102075						
所収遺跡	所在地	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
間堀1遺跡	上赤生田町字上ノ前	116	361323	1393251	20120424 ~ 20120531	120m ²	個人住宅
日向古墳群	日向町字台	10	361627	1393024	20120517	10m ²	その他
岡野・屋敷前・岡遺跡	岡野町字大道北	16	361529	1393148	20120710	10m ²	個人住宅
館林城跡・城下町(平24A)	大手町	33	361443	1393222	20120714	17m ²	集合住宅
館林城跡・城下町(平24B)	大手町	33	361443	1393222	20121128	20m ²	その他
天神遺跡	新栄町字天神	29	361454	1393128	20121212 ~ 20121220	187.5m ²	集合住宅
遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
間堀1遺跡	集落跡	縄文	住居跡1・土坑多數		土器片・石器等	慎重工事	
日向古墳群	墳墓	古墳	溝1		なし	慎重工事	
岡野・屋敷前・岡遺跡	包蔵地	縄文・古墳・奈良・平安	溝2		土器片等	慎重工事	
館林城跡・城下町(平24A)	城館跡	近世	溝1		陶磁器片等	慎重工事	
館林城跡・城下町(平24B)	城館跡	近世	土坑1・掘削痕		陶磁器片等	慎重工事	
天神遺跡	包蔵地	平安	井戸1溝・土坑多數		土器片・陶磁器片等	慎重工事	

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第49集

館林市内遺跡発掘調査報告書

—平成24年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査—

編集・発行 館林市教育委員会 文化振興課 文化財係（館林市文化会館内）

〒374-0018 群馬県館林市城町3番1号 電話0276-74-4111

印 刷 上武印刷株式会社

発行年月日 平成25年3月31日



文化財愛護シンボルマーク

<http://www.city.tatebayashi.gunma.jp/bunka/>